

合言葉は「堀川を清流に」

～産官学民の連携・協働とネットワーク作りの推進～

名古屋堀川ライオンズクラブ

1. はじめに 名古屋の母なる川

堀川は、名古屋の都心を南北に流れる全長約16kmの一級河川です。

今から約400年前、名古屋城築城時に、城下町に必要な米や、野菜、魚、塩などの物資を船で大量に輸送するための水路として徳川家康の命により、福島正則によって開削されたといわれています。堀川沿川にはその運河機能を利用して塩・米・肥料などを扱う問屋業や木材商が発展しました。またその木材を利用して、仏壇・からくり細工などの木工産業なども発達し、今日のものづくり先進地区の基盤づくりにも貢献してきました。江戸時代には花見をしながら舟遊びを楽しんだ様子も絵画などに残されています。

こうして堀川は、長い間市民の生活とも密接なかわりを持ち、名古屋の母なる川として市民に長く愛されてきました。

しかし、昭和初期より次第に汚染が進み、経済の高度成長期にはいると、工場排水や生活排水の流入で堀川はヘドロのたまったくさい、きたない川に変貌。汚染がピークに達した昭和40年には、堀川に捨てられた動物の死体だけでも1,961匹を数えたと記録にあるそうです。

建物は堀川に背を向けて建ち、堀川はどぶ川として、人々にかえりみられなくなってしまいました。

昭和60年（1985年）、国は、「マイタウン・マイリバー計画」の第1号に堀川を取り上げると発表、これがはずみとなって名古屋市の堀川再生への事業が本格化し、ヘドロの浚渫や護岸の改修などが積極的に行われ、水質改善や周辺の環境整備などにもかなりの進展がみられるようになりました。

ただ、堀川は自然の水源を持たない川で水がよどみやすいこと、河口の名古屋港から満潮時には大量の海水が逆流するため、海も含めた対策が必要であること、まとまった降雨時には下水道から汚

水が堀川に流出するが、この改善には大きな費用と時間が必要なこと、干潮時には水位が下がってヘドロが露出する姿が見られること、などの理由から、名古屋の市民の目線から見た堀川は、まだまだ劇的な環境改善を見ないまま今日に至っています。

2. 名古屋堀川ライオンズクラブの誕生

ところで、堀川沿川ではかなり以前から浄化を願う市民がそれぞれの地域で清掃活動や歴史文化の復興などの活動を続けており、それなりに成果があがっています。しかしながら汚染の進んだ堀川のような都市河川をよみがえらせるためには、単に水質の浄化だけでなく、街づくりの観点までを含めた行政のインフラ整備とそこに住む人たちの維持・美化活動などへの協力が不可欠です。また大学や企業もそれぞれがバラバラに研究活動などを実施しているのでは、なかなか目に見えた成果があがってきません。こうした産官学民のそれぞれの活動が有機的に連携し、大きな動きになってきたのはまだ最近のことです。

その大きなきっかけとなったのが、平成11年5月の「20万人署名」です。

名古屋市内約30のライオンズクラブが合同で、木曽川から堀川への導水の早期実現に向けて署名活動を展開したところ、わずか2ヶ月足らずで20万人近い署名が集まりました。堀川に清流を求める市民の強い気持ちがあらためて確認されるとともに、この署名活動は、連携への大きな足がかりとなりました。特に署名活動の中心となったライオンズクラブを含む市民6団体が「クリーン堀川」という連携組織を結成したことは、その後の官民の連携に大きな一歩を踏み出しました。

またこの署名活動の成果により、行政は同年9月、それまで23年間凍結されていた庄内川からの導水

を実施。わずか2日間のことではありましたが、自然の水源をもたない堀川に毎秒3トンの試験導水が行われました。

署名により名古屋市民が熱望した木曾川導水そのものは国の公共事業見直しの中で計画が中止されましたが、ライオンズクラブほか市民団体のよびかけで、堀川に1万本のチューリップを植栽したり、堀川写真コンテスト、シンポジウム、堀川を考える小学生の集い、市民による堀川一斉大清掃などが次々と実施され、堀川浄化を願う市民の声は少しずつ広がりを見せながら具体的な活動が展開されるようになりました。

行政もこのような市民の声を受け、平成13年7月より、庄内川から堀川へ毎秒0.3トンの暫定通水を行うようになり現在に至っています。

こうした動きの中、平成15年4月、私ども名古屋堀川ライオンズクラブが26名のメンバーで「堀川を清流に」を合言葉に名古屋市内32番目のクラブとして旗揚げしました。ライオンズクラブは、全国各地で地域に密着した様々な社会奉仕を実践していますが、特定河川である堀川の浄化・美化に活動の目的を特化して結成された名古屋堀川ライオンズクラブは当時全国でも非常に珍しい存在でした。

3. 産官学民の連携に大きな一歩 第1次堀川1000人調査隊

名古屋堀川ライオンズクラブは、20万人署名以降、急速に市民間の連携が進んできたことから、堀川浄化の悲願を達成するためには大きな市民のネットワークを構築する必要があると考えました。また市民だけでなく大学・産業界も連携して、行政の施策に市民の声を反映しつつ行政の後押しをすることが大切であると考えました。

それを一気に具体化・実現した活動が平成15年から16年にかけて実施した、第1次堀川1000人調査隊です。

当クラブは結成後ただちに内閣官房が募集した「平成15年度全国都市再生モデル調査事業」に応募をしました。

この応募の内容は、当時庄内川から堀川に受けていた庄内川からの毎秒0.3トンの暫定導水を実験的・一時的にもっと増量すると、堀川の水質や環

境がどのように変化するかを市民参加で調査しようというものです。

この企画の主な狙いは、大きく2つありました。

ひとつは中止された木曾川導水計画の復活を願う市民の声に対し、自然の水源のない堀川に安定した水源を確保することが堀川の浄化に本当に寄与できるかどうかを実験し方向性を確認すること。

もうひとつは、大規模な市民調査活動を多くの人に呼びかけて実施することによって、それまで堀川沿川でばらばらに調査活動、美化活動を行っていた色々な団体を結びつけ一気に大きなネットワークと連絡網を構築しよう、ということでした。

設立後間もない当クラブの力では、この大規模な計画を実現することは難しかったのですが、主旨に賛同していただいた名古屋市内にある32の全ライオンズクラブに主催者となっていただき、当クラブは表に出ず、事務局として裏方を担当することで実施体制も確立できました。

そして1000人の隊員を目標に募集活動を開始したところ、2ヶ月の申込期間に予想を大幅に超えてなんと217隊2007名の申込みがありました。

小中学校、大学、ボーイスカウト、一般企業、一般市民、区役所・保健所などの行政団体など老若男女、素人からセミプロまでを巻き込んで、この第1次堀川1000人調査隊はかつて見られない壮大な規模の市民参加型社会実験に発展しました。

4. 第1次堀川1000人調査隊の残した成果

この第1次堀川1000人調査隊は平成16年2月から5月までの4ヶ月間調査活動を実施し、6月に成果発表会を開催しました。

その結果、堀川には市民の視線から次のような問題点があることが報告されました。

- 1) 単純に庄内川からの導水量を増やすだけでは堀川の水質改善にはつながらない。庄内川や堀川に逆流する海水の水質改善を含めた広域的な連携が必要であること。
- 2) 下水処理施設の放流水や堀川に流入する雨水の水質改善の必要性。そのために町や道路の美化活動も必要であること。
- 3) 水上を浮遊するゴミの多さがあらためて確認されたこと。
- 4) ヘドロの除去が必要であること。



1. 堀川1000人調査隊成果報告会
連帯感を強める合言葉「堀川を清流に」

そして市民でできることは市民で、行政がすべきことは行政で、と、それぞれができることをひとつずつ実行してゆくことを誓い合いました。

またこの調査活動を通じて堀川を愛する仲間が増え連帯感が生まれたこと、メーリングリストやホームページの活用により連絡網が整備されたことなども第1次調査隊活動の成果として確認されました。

5. 第2次・第3次調査隊に発展

この第1次調査隊は市民が主催し、名古屋市など行政はバックアップをする、という枠組みで実施されましたが、この成果を受け、その後の第2次・第3次調査隊は、名古屋市という行政も主催者に加わって、官民の協働事業が具体的に実現しました。

平成17年の第2次調査隊では下水処理場の高度処理実験を行政が実施、それを市民が市民の視線で調査・検証するという活動に発展、さらに平成19年から22年まで3年計画で現在実施中の第3次調査隊では、名古屋市民の念願であった木曾川導水を実験的に実施し、その効果を市民調査隊が検証するという活動が展開されています。

こうした調査活動の一方、第3次調査隊活動では、調査活動まではできないが、堀川浄化は応援したいという気持ちをもつ幅広い市民を「堀川応援隊」として取り込み、堀川を愛する人の輪を広げる活動も展開しています。平成19年3月に2,262人でスタートした第3次隊は2年後の21年3月には10,899人に増加、堀川情報を発信するメルマガ登録数やホームページへのアクセス数も急増しつつあり、堀川を愛する市民の情報共有が一気に進んでいます。

また、こうした啓発活動の成果で堀川周辺の清掃活動などを実施する市民が増えたことにより、堀

川を浮遊するゴミが減少していることも定点観測をする調査隊のレポートで実証されており、堀川1000人調査隊の活動は堀川浄化に大きな成果をあげています。

6. 産官学民の連携・ネットワーク作りの推進

第1次～第3次にわたる堀川1000人調査隊の活動において、名古屋堀川ライオンズクラブは、一貫して裏方に徹し、事務局を引き受けてきました。そして市民や行政・大学等の接着剤役として様々な連携・協働の橋渡しをしてきました。

また自らも名古屋工業大学と共催で、平成17年から堀川エコロボットコンテストを開催したり、中部経済連合会などが主催して平成15年から実施している堀川ウォーターマジックフェスティバルの企画運営に携わり、幅広い市民や大学企業などがイベントの企画に参加できるようなコーディネーター役をつとめています。



2. 堀川ウォーターマジックフェスティバル
水辺の魅力を追求 市民の力で企画された
水上ステージとビルの壁を利用した映像ショー

市民が堀川を見直し、関心をもってもらうためには、一般市民が魅力を感じるような企画を次々に実施し、マスコミにもどんどん報道してもらうことが大切で、そのためにはたくさんの人が企画・運営に参加して話題性を高める必要があります。

そのためにも産官学民の大きな連携・協働は不可欠だと考えています。

当クラブはこうした連携・協働の接着剤としての役割や情報収集・情報発信を続けてくる過程において、様々なノウハウを蓄積してきました。



3. 堀川ウォーターマジックフェスティバル
市民調査隊がブースを出展して啓発活動



4. 堀川エコロボットコンテスト
水上型ロボット、陸上型ロボットなどアイデアいっぱいのエコロボットが登場。ものづくりの心と環境を愛する心のコラボです。

行政と市民の協働・産官学民の連携の必要性は従来より認識されていましたが、実際に連携を実現させるに当たっては、情報や、企画・運営の要となりながら舞台裏で事務局を引き受ける存在が必要不可欠です。

当名古屋堀川ライオンズクラブ設立以前にも多くの団体が堀川浄化のために個別には熱心に活動しており、連携をはかろうという動きもありましたが、実際にはなかなか難しく、行政と大規模な協働を実現するには至っていませんでした。

当クラブが設立以来、産官学民の接着剤役を買ってでたことにより、堀川に関する産官学民のネットワーク化が大きく進展したこと、それに対して一定の評価をいただいていることについて、私たちは素直に喜びを感じています。

実際、堀川1000人調査隊によるネットワーク構築・情報の共有化が進み、行政との協働によりステップアップ型社会実験が推進されるようになって、堀川が現実には少しずつきれいになってきました。

またアンケート調査などでも堀川がきれいになったと感じる人が増えており、とてもうれしく思っております。

そしてこれから先もこの活動を継続してゆくことの大切さを痛感しています。



5. 立体まんが劇のキャラバン公演
演じるのは市民団体や学生ボランティア。
協働によって市内の小学校を巡回公演します。

7. ひとつひとつ壁を乗り越えて

「連携・協働の推進」を口にすることは簡単ですが、実際にそれを実現するには大きな困難や苦勞を伴い、それを乗り越えるエネルギーも必要です。

連携するそれぞれの主体には、それぞれの事情があり、アイデンティティがあります。

たとえば個性の強い活動を続ける市民団体同士が連携するには、それぞれの主体の事情を理解し、一緒にやれることは一緒にやり、できないことは無理に一緒にやらないという柔軟な考え方も必要です。

また、行政と市民が協働する場合も、行政は様々な法律などにしばられてなかなか動きがとりにくい点があることについて、市民にはなかなか理解できない面があり、市民にフラストレーションがたまって協力関係が築きにくいということもよく

おこります。

こうした連携の接着剤となるためには、当クラブのアイデンティティそのものを抑えなければならなかったり、当クラブが表に名前を出せず、完全に裏方に徹しなければならない場合も数多くあります。このことで、しばしば当クラブの運営上の難しさを感じる場合があります。たとえば当クラブ自身が会員を増やそうとする場合においても、クラブのアイデンティティが薄まって見えたり、表立って活動できないため、活動している姿が見えにくくなることは非常に辛いことです。

しかし、こうした様々な壁をひとつひとつ乗り越えながら、当クラブは堀川を愛する市民の輪を広

げ、産官学民のネットワーク作りを推進してきました。

合言葉は「堀川を清流に」。

それぞれの立場や考え方に方法論や温度差はあっても、この合言葉だけは共通です。

私たち名古屋堀川ライオンズクラブは、この共有できる理念、夢をたくさんの人に呼びかけながら、これからも堀川の浄化・再生に向けて活動を続けてゆきたいと思っています。

長期企画委員長 服部 宏